

[28_3] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
28(3)

<https://doi.org/10.15017/27229>

出版情報 : 図書館情報. 28 (3), pp.17-24, 1992-12-01. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 28, No. 3 (1992)

目次

- 図書館とコンピュータ 17
- 電算化システムの今後の展開に向けて 19
- 平成3年度特別図書購入一覧 22
- 図書館職員の研修 23
- 特許公報がCD-ROM版に変わります 24

図書館とコンピュータ

松尾文碩

図書館が知識の集積庫であるとするならば、知識そのものをコンピュータに記憶させ、図書館をコンピュータで置き換える構想があってもよい。ところで、現在のコンピュータの泣きどころは、日本語や英語のような自然言語を理解できないことだ。したがって、電子図書館において図書資料が機械可読化されたとしても、コンピュータがそこから知識を獲得することはできないのである。

それでは、知識を理解して記憶するコンピュータシステムをつくるには、どうすればよいのか。それにはまず、コンピュータにも理解できる知識表現法を見つけなければならない。この問題は、人工知能の分野で研究されてきたが、決定的な解がみつかっていない。現在、述語論理、フレーム、意味ネットワークなどのいろいろな知識表現法があり、それらには一長一短がある。ここでは、これらの表現法を知識表現言語と呼ぶことにする。知識を知識表現言語で記述すれば、コンピュータは知識を理解できるのである。コンピュータは、自然言語が理解できないと述べたが、自然言語で書かれた知識を知識表現言語による記述へ自動的に変換することができないのである。

この変換を人間が行って、コンピュータに常識をもたせようという米国のプロジェクトがCyc(サイクと発声する)である。知識を変換する人をCyclistという。Cycは、1984年に始まった10箇年プロジェクトで、200人/年の労力をかけている。当初、Cycは百科事典の知識をコンピュータに入れることを目標に掲げていたが、その後方針を転換して、コンピュータ、アパレル、法律、化学の4分野について、それぞれ独立に知識の記述を行うようにした。方針転換の理由は、百科事典を知識表現言語で書き表すには、Cyclistに要求される知識が膨大であるためと説明している。

実際、Cyclistの仕事はうんざりするような作業に違いない。我が国からCycの視察に行った人達の報告では、プロジェクトの士気は低いということだ。とにかく、Cycの経験は、このような方法では、大量の知識をコンピュータに蓄積できないことを示しているように思われる。つまり、図書館をコンピュータシステムで置き換えるのは、当面、無理ということだ。

そもそも、図書館は知識の集積庫なのであろうか。図書館学にも、図書館は人類の知識の集積庫という考えがあるようである。しかし、図書は情報や知識だけを伝達するものではない。文学愛好家の読書の醍醐味は、作者との精神的ふれあいであろう。数学者、物理学者、天文学者であった天

オガウスは、大学生時代を地元のヘルムシュテット大学ではなく、ゲッチンゲンの大学で過ごした。ゲッチンゲンを選んだ最大の理由は、そこにすぐれた大学図書館があったからだといわれている。ガウスは、その大学図書館でニュートンやオイラーなどの著作物を読みふけたという。しかし、この読書は知識の獲得ではなかったようである。なぜなら、書かれている内容の大部分は、ガウスが自分自身で結果を導き出して知っていたのである。それにもかかわらず、ガウスは読書を極めて重要であると考えていたという。どうやら、ガウスは知識の獲得よりも先人との精神的ふれあいの方に読書の意義を感じていたらしい。

図書館の役割は、知識の集積庫というより、図書資料の集積庫ではないだろうか。そうだとしたら、図書館のコンピュータにとって重要なのは、世界の知識よりも図書資料についての知識であろう。膨大な図書資料知識を理解し、記憶しているコンピュータシステムをつくることができれば、それは図書館職員としてはスーパーマンであろう。コンピュータ業界用語風にいえば、これはライブラリアン・エキスパートシステムということになるだろうか。このシステムは、図書館利用者の質問、相談に応えることができるし、図書館職員の選書や分類の相談に応じてくれる。

このシステムを実現するには、図書資料の情報を知識表現言語で書き表わす必要がある。しかし、Cyc同様、変換作業を伴うので、この実現は容易ではないだろう。しかし、変換作業に先だって、まず問題なのは、自然言語で書かれたものにせよ、図書の要約、書評などの図書情報が組織化されて存在していないことだ。

ひるがえって、現在の図書館サービスにおけるコンピュータの利用をみると、貸出業務の省力化と目録検索システムによる図書カードめくりの能率化が主なものであり、いずれも単純作業の機械化である。コンピュータ利用は、単純作業から始めるのは当然であるから、そのこと自体は問題視することではあるまい。

単純作業ではない例として、図書の主題検索がある。目録検索システムは、主題検索のためには全く不十分である。一方、科学技術論文などの文献検索システムが主題検索に成功しているのは、そのデータである2次文献情報が図書目録のように書誌的事項だけではなく、抄録を含んでいるためである。コンピュータのソフトウェア技術の観点からは、今日の情報検索システムは、必要とする文献だけを漏れなく検索するという意味では、不満足な性能しかもっていない。それでも、文献検索システムに利用者がある程度満足しているのは、抄録から豊富なキーワードを拾うことができ、検索漏れを防ぐことができるためだ。

電子図書館において、図書資料の全文データベースができれば、全文データからキーワードを抽出できるので、キーワードの問題は解決できるかもしれない。しかし、検索された図書から読みたい図書を絞り出すには、全文の通覧は効率が悪く、要約の通覧が必要になる。また、読書の参考に、書評を読みたい場合もあろう。したがって、全文データベースによって、問題がすべて解決するわけではないのである。また、大規模全文データベースをつくること自体、容易なことではない。

自然言語で記述した機械可読形の図書情報があれば、主題検索にも使えるし、選書、分類の支援システムをつくることができる。更に、ライブラリアン・エキスパートシステムを実現するための道も開ける。しかし、現在のところ、我が国においては図書情報を集積しようとする萌芽すらないようである。ところで、既存の機械可読形データであるMARCと2次文献情報は、それぞれ図書目録と抄録誌の機械可読版で、情報集積そのものはコンピュータの出現以前から行われていた。ここに、問題があるのだ。つまり、図書情報の集積は、未経験のことであり、生みの苦しみが伴うのである。

いずれにしても、図書館におけるコンピュータ利用は、当分、単純作業の機械化の段階に留まるように思われる。しかし、時代の流れは、この段階に留まることを許さないであろう。我が国では、図書館のコンピュータ利用は大学図書館から始まった。大学図書館では、そろそろコンピュータ利用の高度化の問題を取りあげる時期にきているのではないだろうか。

(工学部 教授)

(((電算化ニュース)))

電算化システムの今後の展開に向けて

— システム検討WG発足 —

浜 崎 修 一

〈電算化の経緯〉

昭和55年1月、学術審議会は、「今後における学術情報システムの在り方について」と題して答申を行いました。前後して、九州大学附属図書館ではその趣旨に沿って、書誌情報および計算機資源の共有による学術情報の効率的な整備と提供を実現するために、北部九州地区国立大学図書館業務機械化ネットワーク協議会を設け、地域ネットワークシステムの開発に着手しました。このシステムはわが国における本格的な図書館ネットワークシステムのはしりとなりました。

昭和56年1月、日本電気(株)製のACOSシステム350が導入され、図書館業務の電算化処理を開始。以後、昭和58年度には九州芸術工科大学と、59年度には福岡教育大学と、60年度には佐賀医科大学とそれぞれ接続し、昭和60年末には初期の開発目標を達成して、4大学間で順調に業務運用を進展させてきました。なお、このうち福岡教育大学は、平成4年度から学内情報処理センターのシステムの一部に組み込まれ、地域ネットワークとの接続は閉じられました。

一方、昭和61年4月には、わが国における学術情報流通の中核となる学術情報センターが設置され、全国ネットワークによる目録所在情報システムの構築に飛躍的な発展をもたらしています。本学でも61年12月に同センターへの接続を完了し、学術情報センター目録システムからのダウンロードデータの地域目録システムへの変換(IFF変換)プログラムの開発を行い、63年6月より業務モードによる本格的な入力を開始して現在に至っています。

この間、業務拡大、端末・ネットワーク参加館の増加、学術情報センター接続などの負荷を解決するために、初期システムから、昭和58年4月にACOSシステム450へ、さらに62年6月にはACOSシステム610/10へ、そして昨年度末、現在のACOSシステム3400/20へとHOST機器のレベルアップを図り、また端末機の増設や周辺機器の拡充を行ってきました。

〈システムの課題〉

全国に先駆けて構築した地域ネットワークシステムは、以後の図書館システムの貴重な先例となると共に、その後の学術情報センター目録システムへもシステムの基盤となる部分で影響を与えたと言われていますが、初期のシステム開発以来10年以上を経た現在、本学図書館をとりまく環境はさらに大きく変貌しつつあり新たな対応が迫られています。

第一に、学術情報の流通、さらには情報の発信センターとしての図書館機能の充実が、内外の研究者・利用者から一層期待されており、従来のハウスキーピング業務中心の現状から、そこで蓄積した情報を迅速・正確に提供するOPAC(オンライン利用者目録)環境の拡充を図る必要があります。第二に、九州大学でも学内LAN計画(KITE)が進行しており、図書館システムもその一環に組込まれているので、当該予算が認められ実施に移されれば、大型計算機センターを始めとする他のコンピュータシステムやワークステーションあるいはパソコンとのインターフェイスが必要になります。第三に、CD-ROMサーバシステムやイメージ情報蓄積システムなどのニューメディアを取り込んだ電子図書館構想等もシステムとして現実的なものになってきており、情報提供システムの多様化へ向け基盤整備を図る時期に来ているといえます。第四に、週休2日制の実施等とあわせて、図書館業務および人的資源の一層の効率的再編が求められており、システムの管理・運用すべてについてその省力化・平準化が要求されています。第五に、カードによる総合目録を凍結している現状もあ

り、OPAC検索をより充実させるため遡及入力を含む目録データ量の拡充が、重要な課題となっています。第六に、ネットワーク参加館のレベルにおいても、パッケージ化への対応や回線効率の問題等について検討が求められており、地域データベースの役割そのものの意義をも再検討する必要があると言えます。

〈図書館システムの動向と九大システムの方向性〉

本学では、前述のとおり独自開発システムを10年以上使用してきましたが、今や図書館業務システムは、各計算機メーカーともそのノウハウを蓄積して標準化され、パッケージへと進みつつあります。殊に目録システムに関しては、学術情報センター目録システムへの接続と、そこからのダウンロードによって作成されるローカルデータベースの構築について、ほとんどのメーカーがパッケージ化しています。学術情報センター目録システム以前に目録システムを完成させた本学独自システムの最も苦慮しているところの学術情報センター目録システムとのインターフェース部分が、今後のシステム拡張のネックとなる可能性も否定できないと思われます。

昨年12月から今年の1月にかけて実施したシステムのリプレースでは、「将来的には標準パッケージの採用・移行が望ましいと思われる。ただ現時点では、メーカー側もまだ改良を積重ねていること、また採用にあたっては相当の移行ソフトの開発、データ変換作業等が発生するため十分な準備期間が必要であると判断し(注)」従来のシステムを継続することとしました。これに先立つ、平成2年10月、館内に「システム評価」ワーキンググループを発足させ、現行各サブシステムの評価、他大学システム・パッケージの比較検討の作業をすすめ報告書をまとめました。この報告書では種々の問題点や短期的課題、中・長期的課題がそれぞれのサブシステム別に詳細に分析されましたが、時間的な制約とメーカーのサポート体制の保障がないという状況では、その課題は問題提起としての役割にとどめざるを得ませんでした。

前述した6つの「システムの課題」に対応するためには、次期のリプレースにおいて総合的なシステムの見直しとグレードアップが必要で、基本ソフトの拡張性、メーカーのサポート体制等に制約を受けざるを得ない現行システムの維持は、極めて困難であると思われます。

加えて、政府調達による一般競争契約であるため特定のシステムを前提とした仕様書は排除され、パッケージシステムを否定出来にくい状況も大きな要素と言わなければなりません。

〈システムの新たな展開に向けて〉

以上のような状況から、中央図書館では、「図書館業務電算機システム推進委員会設置要項」及び「図書館業務電算機システム検討ワーキンググループ設置覚書」(後掲)を制定、去る7月30日に「図書館業務電算機システム検討ワーキンググループ」を発足させました。全学の図書系職員のなかから各部局の推薦により選出されたワーキンググループのメンバーを「表1」のとおり、利用者サービス・図書・雑誌・システム運用の4つのサブグループに分け、これを総括WGがまとめるという体制で、現行システムの全面的な評価、将来のシステムはどうあるべきか等について継続的に検討してゆくことにしました。

今回のワーキンググループは、第一次として平成5年3月までの期間とし、引き続き第二次のワーキンググループにより、その成果を発展させることになっています。検討のスケジュールを「表2」に紹介します。また検討の内容は学術情報センターの電子掲示板を利用することとし、センターへお願いして特定利用掲示板「QUIZ」を設置、各打ち合わせの記録をすべてこの掲示板へ掲載することにしました。

本年7月23日、学術審議会は「21世紀を展望した学術研究の総合的推進方策」(中間報告)を文部大臣に提出しました。その中で「大学図書館については、学術研究情報ネットワークの活用により連携協力を進めるとともに…」として機能強化を求めています。また本学ではキャンパス移転の方針が明らかにされ、新キャンパスへ向けての基本構想(案)が公表されました(6月5日評議会)。その中で新キャンパスにおける図書館の配置にも言及されています。これらで求められている図書

館の機能とこれから検討するシステムが無関係でありえないことは当然のことと考えられ、システムワーキングへ期待するものは大きいと思われます。

(注) リプレースにあたっての、九州大学附属図書館電子計算機組織更新基本計画書(平成3年3月)より引用

図書館業務電算機システム推進委員会設置要項

平成4年6月30日
附属図書館長 裁定

1. 設置

九州大学における図書館業務電算機システムの開発及び運用を円滑に進めるため、これに必要な体制として「図書館業務電算機システム推進委員会(以下、推進委員会という)」を設け、推進委員会の下で専門的検討作業を行うため「図書館業務電算機システム検討ワーキンググループ(以下、システムWGという)」を置く。

2. 組織

前項に掲げる推進委員会及びシステムWGの組織は次のとおりとする。

- (1) 推進委員会は、全学の図書系掛長(主任)以上の職にある者及びその他の者をもって組織し、館長が委嘱する。
- (2) システムWGは、全学の図書系職員の中から館長が委嘱する者をもって充てる。

3. 任務

推進委員会及びシステムWGの主たる任務を次のとおりとする。

- (1) 推進委員会
 - 図書館業務電算機システムに係わる基本的な事項の検討及び策定、並びに部局間の連絡調整
- (2) システムWG
 - システム設計及び開発

4. 責任者

推進委員会は附属図書館事務部長が責任者となって運営し、情報管理課長、情報サービス課長及び情報システム課長がこれを補佐する。システムWGの責任者は情報システム課長とし、情報管理課長補佐及び情報サービス課図書館専門員がこれを補佐する。

5. 事務

推進委員会及びシステムWGの事務等は、システム管理掛がこれにあたる。

付記

この要項は、平成4年7月1日から実施する。

図書館業務電算機システム検討

ワーキンググループ設置覚書

平成4年7月1日

1. 構成

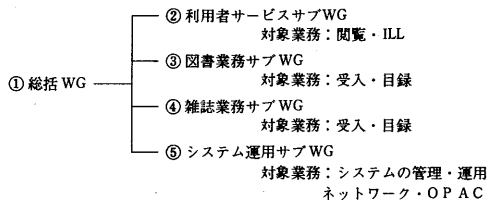
システムWGは原則として次により構成する。ただし必要に応じ増減することができる。

- ① 情報システム課長
- ② 情報管理課長補佐
- ③ 情報サービス課図書館専門員
- ④ 中央図書館 図書系掛長 7名 掛長を除く職員 6名
- ⑤ 分館 掛長 各1名 〃 各3名
- ⑥ 文系図書掛 掛長 1名 〃 2名
- ⑦ 理系図書掛 掛長 1名 〃 3名

2. 組織

システムWGは次の体制により任務を遂行する。

- (1) 各サブWGにチーフを置く。
- (2) 総括WGは前項の①から⑦までの掛長以上の職の者、各サブWGのチーフ及びその他で組織する。

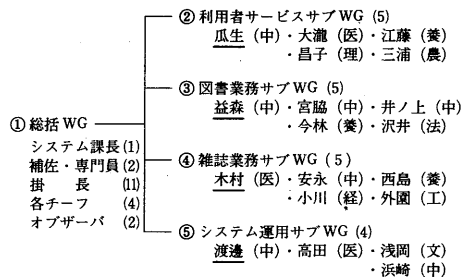


3. 任務

システムWGの主たる任務を次のとおりとする。

- ① 現行システムの業務分析と問題点の洗い出しを行う。
- ② 他の図書館システムの現状について、学習・見学を行う。
- ③ 次期システムの基本仕様について提言を行う。
- ④ システム移行について提言を行う。
- ⑤ 検討の状況を随時報告する。

表1 システム検討WGの体制



*アンダーラインはサブWGのチーフを示す。

・総括WGのメンバー

- 長情報システム課長、森松情報管理課長補佐、
- 落石情報サービス課専門員、山崎受入掛長、末次閲覧掛長、
- 井上相互利用掛長、山田参考調査掛長、下川第一目録情報掛長、
- 福永第二目録情報掛長、浜崎システム管理掛長、
- 伊藤医学分館目録掛長、緒方教養部分館目録掛長、
- 田嶋文学部図書掛長、園田理学部図書掛長、
- 各チーフ(瓜生、益森、木村、渡邊)
- オブザーバ(九州芸工大、佐賀医科大)

表2 システム検討WG (第1次) 作業スケジュール

平成4年7月30日

	H.4/7	8	9	10	11	12	H.5/1	2	3	備考
1. 現状分析 (現行システムの評価) ・調査 ・分析 ・報告書作成										周辺大学を含む全学の状況を網羅的に調査分析する。
2. 図書館システムの比較 ・データ収集 ・分析 ・比較表作成										他大学などの実績の外、最新の技術動向も検討課題とする。
3. 次期システムの基本要件について ・提言作成					第2次WGの作業とする					
4. 次期システムへの移行について ・提言作成					第2次WGの作業とする					

参考: 第2次WGの作業 -

- ① 次期システムの基本要件についての提言作成
- ② 次期システムへの移行についての提言作成
- ③ 次期システム移行計画 (案) 作成
- ④ 組織 (体制)・業務の見直し検討

(情報システム課 システム管理掛長)

本学教官・名誉教授著作寄贈図書

〈中央図書館〉

湯原 浩三 (工)

「大地のエネルギー地熱」
古今書院 1992

〈中央図書館・教養部分館〉

小野 和人 (言)

「メインの森」
ヘンリー・D・ソロー著, 小野和人訳
金星堂 1992

〈文学部図書室〉

迫野 虔徳 (文)

「今昔物語抄」
和泉書院 1992

菊竹 淳一 (文)

「相見香雨集三」(日本書誌学大系45-3)
中野三敏, 菊竹淳一共編
青裳堂書店 1992

〈農学部図書室〉

村上 浩紀 (農)

Animal cell technology: basic & applied aspects.
Kluwer Academic 1992

(((資料紹介)))

平成3年度 特別図書購入一覧

推薦学部	図書資料名	推薦学部	図書資料名
文学部	1 古筆手鑑 ^{ひがまつ} 「高養帖」	法学部	3 Bewahrungshilfe. Jg. 1(1954)-34(1987) (保護観察誌)
	2 佐竹文書 35mmポジティブロール 52リール	経済学部	1 Revue française de comptabilité. Ordre des experts comptables et des comptables agréés. 1955-1987. (フランス全国専門会計士, 公認会計士協会の会計学雑誌)
教育学部	1 近代日本・青年期教育叢書 全30巻 第I期 青年期教育論 第II期 青年学校論		2 Historical journal. Vol. 1(1958)-33(1990) (歴史雑誌)
	2 Carnegie Mellon Symposia on Cognition series. 11 vols. (カーネギーメロン認知発達に関するシンポジウム叢書)	図書館	1 IBZ- Internationale Bibliographie der Zeitschriftenliteratur. Bd. 25(1989)-26(1990) (雑誌記事索引)
法学部	1 Stadesamt. Vol. 1-21. (戸籍雑誌)		2 朝日新聞全文記事データベース CD-HIASK 1990
	2 Critique de l'économie politique. Vol. 1(1971)-15(1985) (レギュラシオン理論・経済理論研究)		3 朝日新聞記事総覧 昭和戦後編 VI 第29-32巻, 別冊人名索引

図書館職員の研修

落 石 清

「図書館員だからその程度のことは当然知っている筈だ」、「万卷の書があるのだからその中から探してくれるのが仕事」、「私が探している漠然とした広い概念を的確に要約または包含した言語に置き換えて効率よく検索してほしい」などと図書館に対し学内外の利用者からきびしく要求される。専門職であるからという信頼を受け、より高度な密度の濃い情報をスピーディに提供するためには、図書館職員は受動的学習態度では情報の流通やハード面の進歩についていけない。一方、過去に遡って先達の業績を繙くには、文献を網羅して参考となるものを選びすぐりエッセンスを導き出す必要がある。今、国民の生涯教育が求められているが、図書館職員こそ真っ先に精励することが義務でもあろう。凡人は不精癖があり、要求があるまで行動を起こさない。入館者数に満足し、目録至上主義となり、又、図書管理に徹するようでは、一步も前進できない。おのおのの職員が個人で自己啓発による研修を積み重ね、即ち、学んでも学んでも、十分でない知識を生涯教育によって、培われるものとしなければならない。

1980年代のシステム開発に一応の目度がついて、ほっと一息つく間もなく、周囲を見回すと、現勢では古典に対する知識や理解が十分に諸先輩から引き継がれておらず、図書館機能としての古典整理に危機感さえ覚える状態になってしまったことに気がついた。

そこで、先ず、古典を繙くことから始めるべく古典籍研修会を平成元年度から企画した。国書・漢籍・西洋古典の三部会に分けて研修グループを組織し、本学の諸先生に指導を願って出発した。

国書部会は、文学部中野教授が平成元年3月から年数回のペースで三年来江戸期刊本書誌学についてオリジナルの和本を手にとりながらのユニークな内容であった。受講生は江戸期の鬻や桃割れ図書館人になったような錯覚に陥った。文学部学生数名もカリキュラムにない授業として熱心に聴講したこともあり、今後も、継続していく予定である。

漢籍部会は、本学中央図書館所蔵の漢籍目録上梓の計画も相俟って、文学部町田教授ほか柴田助教授から中国学のアウトラインを鳥瞰し、ツールの種類、在日漢籍の位置づけなどを研修した。私達が日常使用している漢字の再認識や、今まで、全然見たこともない難しい読めない漢字を眺めて辞書を引き、読みと意味を知るといった単純なことからはじめて、そこから広がっていく学問の深みや楽しみを垣間見ることが出来た。また、図書館員としてめったに遭遇しない索引作りは、千載一遇のチャンスであるばかりか、日本人として生涯切り放せない漢字と図書館情報の関係をじっくり考える絶好の機会である。

西洋古典部会は、先ず、法学部西村教授が「ローマ法大全刊行史」を手がけられ、東ローマ帝国の実定法が西洋中世の法律学においては日本を含む現代大陸法へ与えた影響を本学所蔵のオリジナルテキストをからめて出版面から示された。

次に、言語文化部の Wolfgang Michel 助教授が、「欧日文化交流史」としてスライドを駆使して大航海時代を背景に、キリシタン文献を筆頭にキリスト教文化とのかかわりに始まり、プロイス「日本史」とケンペル「日本誌」を取り上げて、風俗や文化を比較しながらシーボルトに至るヨーロッパサイドから観た極東・日本学が異彩を放った。

また、文学部吉井助教授は、「アンドレ・ジイドの文献学」とフランスの小さなジイド資料専門図書館にスポットを当てて、著名人の原稿研究について蘊蓄を傾けたお話があった。

続いて、法学部西村教授から、西洋古典についてはラテン語の理解こそ重要であることを指摘され、本館で初のラテン語講習会を昨年の初級から継続して開講願っている。しかも、本学所蔵16・17世紀出版のラテン語の図書をテキストに使用しての実務に即した「図書館職員のためのラテン語講座(中級)」をセミナー形式で行った。テキストのタイトルページに表現されたすべての文字を読解し、プリンターズマークの寓意を読み取ることまで含めて、書誌に接する姿勢を教えられた。

この様な研修により、図書館職員が古典に目覚め、歴史ある大学図書館の埋もれている珠玉の蔵書を甦えらせてもらいたい。

「あの図書館(室)にはすぐれた司書がいる」と聞こえてくることを願って、今後、時宜になつたテーマをタイミング良く選び、機会を作って、研修会を継続していかねばならない。

(情報サービス課 図書館専門員)

(((お知らせ)))

特許公報がCD-ROM版に変わります

平成5年1月から、CD-ROMによる公開公報が従来の紙による公開特許公報、公開実用新案公報と同日に発行される予定です。また、従来の紙による合本公開公報は平成5年1月以降1年又は2年で発行を中止する予定と伝えられております。

特許庁は、全国に公開施設(特許公報閲覧室)及び非公開施設を設置しておりますが、非公開施設に対する今後の交付の基本的考え方は、(1)CD-ROM公開公報を基本とする(2)従来の紙による公開公報利用形態をCD-ROM公開公報のみ又はフロントページ集のみに切り替えるとしております。又、非公開施設が、省スペース化、及び情報検索の多様化、迅速化を図るためCD-ROM公開公報を主体とする閲覧体制を構築することを期待しています。

非公開施設である本学は、戦前からの実用新案公報を収蔵し、現在は紙による公開公報の配布を受けております。紙による公開公報は年間6段書架5連のスペースが必要ですが、CD-ROM公開公報では年間約100枚の発行であり、CD-ROM100枚分の保管スペースですみます。

また、CD-ROM1枚当たりの収容情報量は約5,000件であり、15項目のインデックスで効率的検索が可能であるとしております。従って、紙による公開公報の発行中止、保存スペースの狭隘化対策及び多様で迅速な検索機能の確保ということからもCD-ROM版への切り替えが必要となります。中央図書館ではCD-ROM機器の整備見込みがついた時点でCD-ROM公開公報への配付変更申し込みを行いたいと考えております。それまでは、従来通り合本公開公報26区分の無償配付を受ける事になります。利用者の方々のご理解とご協力をお願いいたします。

(情報サービス課)

◆ 人事異動 (平成4年9月~10月)

(中央図書館)

- 9.16 山崎 裕美 情報システム課第二目録情報掛に採用(事務補佐員)
10. 1 岩崎 好美 情報システム課第二目録情報掛

- (情報管理課受入掛)(事務補佐員)
9.30 高木美砂子 退職(情報システム課第二目録情報掛)(事務補佐員)

◆ 日 録 (平成4年8月~10月)

- 8.21 保存書庫・貴重書庫の消毒
25 システム検討ワーキンググループ、サブ委員会
26 著作権講習会(九大工学部) 28日まで
9. 8 分館長会議・附属図書館商議委員会
10 九州地区大学図書館協議会誌第35号編集委員会
11 館内掛長会議・全学図書系掛長会議
16 学内LAN対策会議・図書資料選定委員会
17 NECとの打ち合わせ
10. 6 第5回日米大学図書館会議(東大) 8日まで
12 日米ワンデイセミナー(京都外大)

- 10.13 第12回西洋社会科学古典資料講習会 16日まで
16 システム検討総括ワーキンググループ会議
KITE専門委員会
19 KITE 作業班打ち合わせ・ネットワーク関係講演会
21 平成4年度漢籍整理長期研修 23日まで(東大)
28 国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会・理事会(京都大学)
29 福岡県・佐賀県大学図書館協議会福岡地区研究会(九州産業大学)

編集委員 主査・松本 連蔵, 委員・山田 律子, 光安 信人, 浜崎 修一, 出島 照義, 園田 国昭, 古賀 幸成, 吉村 俊亮, 青柳 良輔

九州大学附属図書館報「図書館情報」 Vol. 28, No. 3 (通巻165号)

1992年12月1日・発行人 近藤 禎禎男

発行所 九州大学附属図書館・〒810福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話 641-1101 内線 2454